

57152

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written on aged, yellowed paper and is enclosed within a rectangular border. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be organized into several lines or paragraphs. Some words are written in a larger, bolder hand, possibly indicating emphasis or specific terms. The overall appearance is that of an old, well-used manuscript.



小倉の山荘はあぬ人をやり舟人の目も小倉
 業は茅屋はあぬ人待夕義はく之弦の
 一間を隔る志のびの駒の客人ありまじりか
 小梅の冠電やわもあぬ藤はまき岸はよる
 づのお訓棹さすう柳都の志は好は北極の
 定さんが撰む百首を都と一巻おらぬ雲の上
 張は中下弦の反古の程すま何れあれ一とひり
 まらんの程を帝はあし下棹まらぬ
 秋の田の存ら
 くらどものさすうりいさうん
 一とや溪の
 つゆおぬま

秋
 うぜうらうらうらうらうら
 のものどろがわる
 あいせきさのふわど
 法くちやあひひの
 つけんそあるまざりの
 うららのこら



富士のさか根もつやう山形赤人

あまのあたまもさかしの
お月平

法いといけり

おまふらさうといけ 猿丸を更

はまうのまふら

夜まさうのあつた

あつたあつた

かささぎのつとす 中納言家持

揚さんらのはり

さそて来ぬのり

あささうをさうのう

お月もまんとの 安倍仲磨

あうりささて

ささて

とわさてぬさ

おとけの月を 妻持法師

世成字法と

あまのまをり

ささのりか

花のゆら考の 小野小町

らほろ成りて

あんどら

ぬーのむ



ゆくもくくるも 標丸

こひとまをちり

おまひつとまを

こひのこち

鐘かねゆうくくても 壺つぼ蔵くら

人ひとめめははげげよ

ねねののここああれ

志こころををししとと 刻ときききぬぬせせ

ささめめて 倍よここ遍へん販はん

ああららりりととるるささぎぎ

ききぬぬままををささぐぐりり
素もとののせせままひひ



礼れいををししてて 海うみ系けい太たい臣しん

ままごごととななららるるくく小こ

人ひとががああるる

君きみががああららるる 光ひかり孝たか天あま皇みまろ

書かきくくつつととああららて

船ふねのの

ああららるるああららるる

ああららててととああららるる

ままごごととななららるる

人ひと目め志こころののんんをを 中ちゆう納なつ玄げん乃の平へい

ううららりりととんん



社務ある代も 在来業平船長

さうあのおおの

や小版が立田川

君小よる

あともう海根船の 報行

ああのうよひ 治 船行

さん やがり

あをりぞこのせ成 伊勢

さうてよくら

あんのくらう成

さるさるのう

さくらん 元良親王

あはあやとろが

あをまうね

今来んとつて 素性法師

さくら

よりや小いせとそや

秋の 忍明さりの髪

茶木のあやまを

あても

やがて 芽とどろ 文屋康秀

あはあ



膝の短衣

大に子甲

まんとおこしき

うさぎひとりの

このおひ

うのみまゆく紅筆

とんねりもまづの

おこしき

菅家

ちりしぐさ

志のぶ志路哉

さうやをくくと

人おあつとま

三條右大臣

あつとまのう



志のぶ志路哉

ころがあつと

いりよさあずお

ちりしぐさ

貞伝公

いとさてたがや

中納言

あつとま袖お

とめなるとまうね

いづとがら

林

さあひ

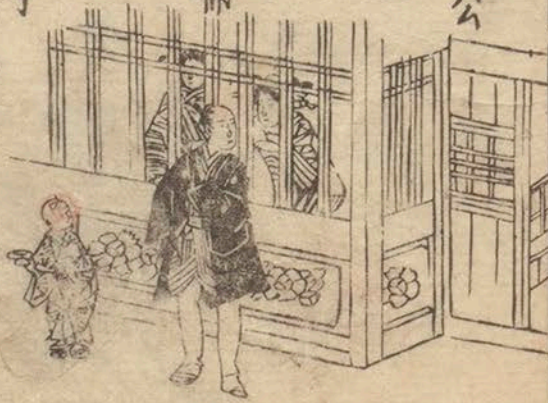
源宗子

とせとさ人月

おは

志のんで

そつと来り



おのゝあぢ葉あぢ

九河内新垣

同らつりぢして

とらまよのんを

まがささた

はまあゝあまてあま 土生右岑

あうつさよりも

まのりのうさ

よひのを

月つきとらるまで

坂上

降ふるあぢささあぢ 是列

けしよ居はぢけ

おらぶとて

おのゝあぢらこ

表列樹

せさしめしませ

若わぐいのあぢれあぢ

ととりこぢ

既なもあぢぬあぢ

紀友列

あぢとらあぢあぢ花はなの

けさのさ

乳ちおがれ

おとまらのもの

表列

おう二ねん

奥月

ちやむいおあて

おとま



星の二階式 紀美之

せうまて居ても

香がのこる

まごよひとおりぬ 清原深養父

若もあぐりう

ゆのうひさるす

いまこゝの夜

志のつと

誅とほくねごと

とあてをあらわど

母ごごね

文彦の席

志のつとねごと

つとすゝねがも 右近

志のつとあいが

なをるあまの

志がくらり

小の志のつと 冬藏等

志のつとまご

ゆりうらうら名も

人のくら

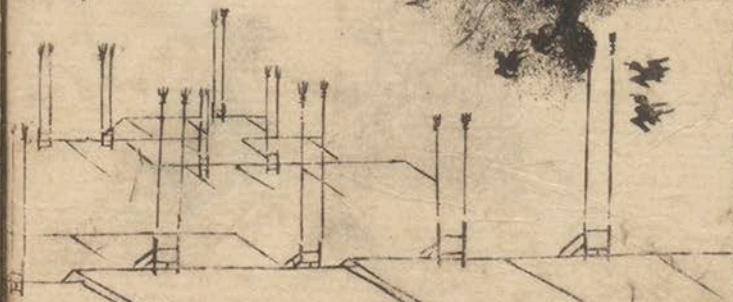
志のつといづも

はひりら小出

平若登

ゆのやあつと

いとがま



人志はびおとひ 壬生右足

そわさるはしこしこがたの

とふもかざるも

むひひと

未のまのふあ

清宗

こそすさても 元捕

かりりやせぬぞん

つがころ

なまどあひえ 権中納言

あふそのおひ 敦右

あふぬむし い

あふの 中納言

あふの たふ

かう小おとひ 志まひ

志まひ

あふも あふ

あふ あふ

あふ

あふ

八 あふ

あふ あふ

あふ あふ

あふ あふ



親もつらさぬ身みの 徳徳公

いづれづらふことしや

あめてふらう

きぬ

若らうわかのうらより

源重之

手あふぬゆふ

けしややきし

祐也のうら

神かみのかみぞびむつゆい

とこそえてようねま

もー 清自きよ魚いそ

大中おほなかつ伝

あこと 隆宣たかのぶの伝

君きみがさあめあめのあめのあめのあめ

義孝

まゑのほゆわど

ゆちのわ

せぬ

トいとがやい修しゆ明めいの

辰原

とさうでいあいの

寛方かんぽうの伝

しとゆめ

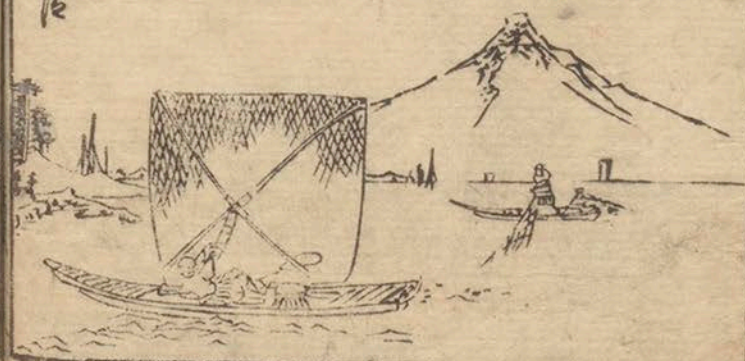
外うへをとあいづく

あや 明あやをあやくらうと

さしてあつたの

鐘かねやうらうすが

うらいらい 辰原たしはらの伝でん



ひかり
人ねる夜のその 右大納
あくるまのあつめ 左徳助

新さへまうち

一う移る

かきくぬまうしい 儀月 三司助

かきくぬまうしいの

のまぶらち

流のおとやど

世けんへむけざりせ

うさき名と

あがきりの

大納言公任



ひかり
一円たうりともあせれ

うちあわいざ 和泉 武助

このま

こころまど小

夜の月こうや 世武助

拾ふのをともむるを

ちうり

あしがき

かあひのめ 大武三佐

あがきありまやま

あがきありまやま

あがきありまやま



ぬいさまの夜よの 赤澤を渡る

ましましりくともあけて

かきつゝましましり

こゝろ

こゝろをくぐりて

小式部内侍

なつあめをまてとさるて

けし目ひま

あともひるび

いらぬ鳥もなつた

伊勢

ついでひとのさく

大浦

くゞりやや八やすあも

ささりのせぬ

鶺鴒あひろとこのんでそ

清少納言

たのまよさそを

おんをけかへ

ましましり

あともくろを

左系太

人ばてあを

尾雅

さつこひとを

ましましり

川か市しのせ小

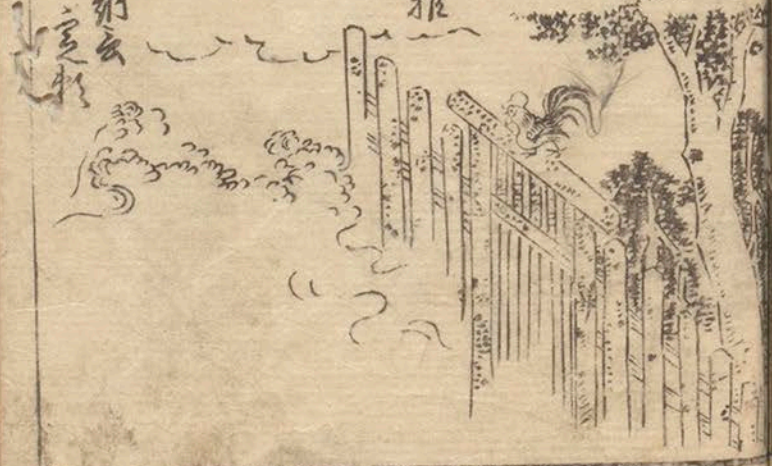
網代あみしろとちるあを

あいらいを

ひのかを

中納言

定頼



恋ふくらむん名ハ 相持

あけまど今き

こゑ比ても

ままのせぬ

夜もやまくも 大徳正

あそまそとあそ人 竹弓

さらさらどりや

床のたん

アソヤ後とも

あまのあやうぐ 周防 内侍

そまドやうき名の

うひがみい

年ハとらむたりの 源後頼

あそまをばて

あそまそりのや

せぬ

ちごりすても

あそあそくとあそと 養後

ののちれ

くまのいろ

あまのまろく 法性ちん

うせまくとそい 希実向


あひトやあぶるの 大政 大臣

うごあ



岩^{いん}小せつきて 崇徳院

こころこころも末^{すゑ}も

なごりせきてまこ 

あぢい^{あぢい}ま ^{ちどり}の

澄^あ澄^い清^きこう^うあ^まの ^源 ^善 ^胃

たのくとあまりの

ぬ^との^らう^ごが

こころ

雪^{ゆき}の^こころ^まは^な ^左系^大丈

の^まは^る月^づみ ^顯 ^補

あつとえうらま

うらとら

悪^{あく}髪^{かみ}の^こころ^まは ^侍 ^賢 ^門 ^内 ^堀 ^川

くよく^くお^りら^りの^より^も

りつてま^ま人と

人がいみ

月^{つき}と^な代^{しろ}えん^ぞ ^後 ^徳 ^大 ^ち

は^とう^ひ余^そを ^左 ^大 ^臣

こゑま

わとせうひ

玉^{たま}の^やう^たら

あ^まい^とら ^左 ^同 ^法 ^師

あ^まい^とら ^し ^の

あ^まい^とら ^げ ^ん



牛のちりらと 皇太后 ちま後成

あふいとそふんが

あまのあふも

あふも

はとあうりける

後永清補

女帝とこうんがさあとも 物

こころで

後永清

あげとくあふも

あねぢりあいのうらじや

あんどく あつ 法

うしろがけ 法

ぬのをやけんと 後永清

いものうらじや

そふんが

あふも

あふも あふも

寂蓮

のこころびにまふじ 法

おののめ 法

あふも

はとあうせと

うらじや 皇太后 門院

あふも あふも 子

あふも あふも 夜



たうんの玉の徳

式子内親王

さえるものさへは

あひで苦勞と

すまぬま

ねとみだてねまきる 股堂門院

雨のそむゆりゆい 大浦

しつりしめ

とうげうさ

きりぐくそてあぐや

お夜のびやうぶの中お

あもてさきしき

さむしり

後系極

松政系

大政大伝

人の知ろろいゑの意

二条院

後波

そでのかり

おもろさの沖の

あまの小船の

後倉

右大臣

穏ふゆさるて

風おまろせ

このうら

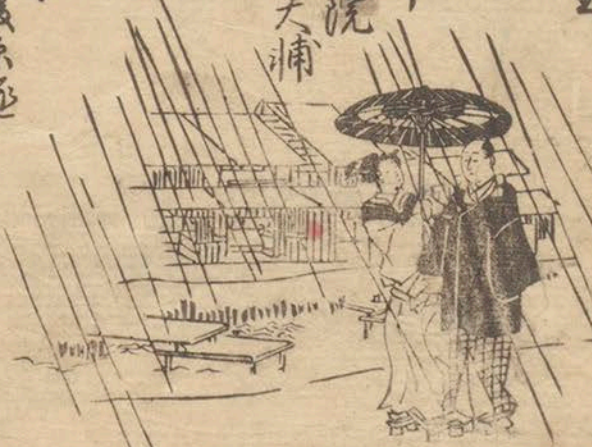
秋の夜風の

さるんくるとあけて

さき

参議雅経

かみふね



えとくらしきが お大信の巻圓

こしや思ぞめの

袖とかごのりもめて

あひ 庭のあじふるや 入彦 大政大臣

なをせはとれ

こしーが

りのあとい

やうと首尾しへ 権中納言 定家

このゆゑのぞめ

ぬーとまろさの

うーとま

こゝの川でり 陽成院

こしやあけきと

恋ぞはりりて

あちとあち

あひのまろしふ 俊三郎 在院

こしとぞのよひがまのき

あーと

あさかま

あぢさなまき世よ 後鳥羽院

あを息さいと

あともまあまうんが

あまがこ



